広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ポーリーヌの使命感
Author(s)	村瀬，延哉
Citation	フランス文学 , 19 : 1 - 9
Issue Date	1992-07-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040988
Right	
Relation	

ポーリーヌの使命感

村　瀬　延　哉

コルネイユの所謂四大悲劇は，繰返し上演され，人口に膾炙しているにもかかわらず，言わばその根幹に係る部分に，不可解な点が少なくない。『ポリュークト』を例にとれば，女主人公は，夫と昔の愛人のどちらを本気で愛しているのか，同時に二人の男性を愛することは可能なのか等の，ある意味で通俗的な，しかし戯曲を理解する上で不可避な疑問に直面する。拙論では，永年論じられてきたポーリーヌをめぐるこの問題に，多少なりとも新たな観点を提示できれば，と願っている。

さて，コルネイユ劇において，主人公の心理が，観客によって全く異なった風に理解されるのは，劇が小説等と違って，登場人物の心理を事細かに説明するのに適さない芸術形式だからだろうか？あるいは，彼の芝居に固有の特殊な理由によるのか？たとえば，プレーの次のような指摘は，どの程度まで正しいか？

> コルネイユの主人公において特徴的なことは，存在と意志が，一瞬のうちに同一化する点である（…）オーギュストの寛恕の瞬間と，その寛恕によって放棄された復讐と不信の過去の間には，一体どんな関係があるのか（…）コルネイユは，因果律の支配する持続の中に，選択というその行為によって，根本的に異質な持続を導入し，前者を粉砕してしまう。前者は，意志的瞬間と接触して，消滅するのである。コルネイユの主人公は，過去のない存在となる[1]。

確かに，二者択一の状況に追いこまれた主人公が，最後の決断を下す時，その強い意志力によって，過去の諸々の感情が，彼の内からたちどころに一掃されるかの印象を与える。『シンナ』のオーギュストが，暗殺を計ったシンナやエミリーを許すのを見ると，彼は残忍な権力者から，慈愛に満ちた君主に一変したと，考えたくなるだろう。しかし，一方で，人間の感情，行動には一定の習性が存在する以上，にわかにそれらを覆す認識，意志が示されても，観客は容易に信用できない。極端なことを言えば，ナポレオンのように，オーギュストは政治的効果を狙って，偽善的ポーズをとっただけだという解釈も，成り立たない訳ではない[2]。あくまで建前を貫き通すコルネイユ劇の人物の場合，彼らが口にする言葉

と腹の中は，どの程度一致しているのか？これから検討するポーリーヌのケースでも，先ず浮かんでくる疑問はこれである。

ポーリーヌは，心気高き勇士ではあっても，財力に乏しい恋人のセヴェールを諦め，父親の命に従って，アルメニアの大貴族ポリュークトと結婚する。新婚二週間後，夫の死を暗示する不吉な夢に怯えた彼女は，侍女のストラトニスに向って語る。

> 自然な愛情から，恋人に捧げていたものすべてを，私は，義務に従って夫に捧げました。もし，お前がそれを疑うのなら，この不吉な日，私の心がどれほど恐れにおののいているかを見れば，分かるでしょう[3]。

夫への愛の証ととれるこの台詞にもかかわらず，女主人公が本心ではセヴェールを愛していたと考える観客が，跡をたたない。

ルイ十四世の王太子妃は，悲劇を観賞した後，彼女を「夫を愛していない貞淑な妻」[4]と評した。コルネイユ劇の良き理解者サン＝テヴルマンも，悲劇の興味が「ポーリーヌとセヴェールの対話」にかかっている，と断定してはばからない[5]。このような見方は，ヴォルテールを初めとする十八世紀の観客にも共通しており，悲劇は専ら二人の異教徒の悲恋物語として観賞された[6]。つまり，女主人公のセヴェールへの愛が，劇観賞の前提として存在したのである。

さらに，現代に近づくにつれ，様々な解釈が現れるが，ここではランソンとドゥブロフスキーの説を紹介しておこう。

ランソンは，コルネイユ劇を理解するのに，『情念論』に述べられている「善」(＝bien)，「悪」(＝mal)，「愛」，「意志」，「認識」等に関するデカルト哲学を援用した。そして，ポーリーヌは，愛人より夫の方が「より偉大」で，「より高度な完全性」を体現していると認識し，最終的にポリュークトを愛するようになるが，少くとも劇の冒頭では，二人の男性を同時に愛しており，特に自然な情愛という意味では，セヴェールの方に傾いている[7]，と考えた。

またドゥブロフスキーは，先ほど引用したポーリーヌの台詞が，彼女の本心を表わしておらず，逆に彼女自身にかけた暗示，自己欺瞞の表現だ，と判断している。

> ほんの一瞬でも，「理性」が「情熱」を一掃したりはできない。肉体が，五感が，抵抗するからだ。ポーリーヌはストラトニスに向って，父親がポリュークトを選んだ後，「自然な愛情から，恋人に捧げていたものすべてを，私は，義務に従って夫に捧げました。」と明言するが，真に受けてはいけない。反対に，彼女が自己欺瞞に陥っている

のを見抜かねばならぬ。彼女は，夫への愛を自分に証明することで，自分自身を安心させ，納得させる必要があるのだ[8]。

ドゥブロフスキーは，その著書で，ヘーゲルの『精神現象学』の「主人」と「奴隷」の概念を下敷きにしながら[9]，コルネイユ劇に一貫するものとして，支配者としての貴族的倫理の確立というテーマを仮定した。この倫理は，何より自己の内にある人間的弱さ，特に恐れを初めとする諸々の情念を克服することから成り立つ。ドゥブロフスキーの解釈の斬新なところは，通説に反して，このような克己の試みが次々と挫折し，遂には「主人」としてのヒーローの確立が失敗に帰すことを，コルネイユの全作品を通じて，証明しようとした点にある。従って，ポーリーヌの場合も，二幕二場のセヴェールとの再会の場面と，その前後の彼女の心の動揺を分析して，実際には，彼女がいかに完全な克己心にほど遠いかを，明らかにしようとした。

ところで，読者や観客が，女主人公は実はセヴェールの方に惹かれていたと判断する根拠は，ドゥブロフスキーの場合でもそうであるように，二幕二場に負うところ大である。アダンが，「おそらくあらゆる時代を通じて，文学が極めた最高極致の一つ」[10]と称賛するこの場面をいかに解釈するかが，従って，拙論の主要な課題となろう。

☆　☆　☆

コルネイユの初期喜劇から四大悲劇へと目を転ずる時，我々の注目をひく際立った変化とは何だろうか。その一つは，劇中に描かれる社会生活，人間関係に対する作者の視点が著しく広がり，リアリティーの厚みを増した点ではなかろうか。

もちろん，風俗喜劇の色彩が強い初期の作品においても，リアリティーが無視された訳ではない。『法院の回廊』のリザンドルとドリマンは，空想に頼って仰々しい恋の狂乱ぶりを描く作家達を軽蔑し，恋愛劇を書こうと思えば，先ず第一に必要なものは現実の恋愛体験であり，体験に即して筆を進めるべきだ，と主張した[11]。彼らは，明らかに作者の意見を代弁していると言えよう。

しかし，それにしても初期喜劇の登場人物の多くは，恋愛と結婚のことしか関心のない恵まれた環境の若者達である。彼らの年令，出身階級からして，関心が異性関係に集中している点をリアリズムとみなすことは可能だが，真に現実の重み，広がりを実感させる作品は，『ル・シッド』以降にならないと現れない。もはや自分自身の感情だけに耽ってはおれない，社会的責任を背負った若者，主人公が登場するのである。ナダールの表現に従えば，「ゲンスやクラン（の氏族社会），故国あるいは国家といったある一つの全体に，組み

こまれた個々人」[12]が描かれている。その結果，

> このような劇のスタイルにおいては，恋愛のためだけの空間は存在しえない。愛の感情も，自分に与えられた地位をわきまえ，風俗や社会生活（…）と雑り合う。愛が純粋すぎて，孤独の中に逃避したり，独善的で，家族や故国（…）を棄てたりすることはなく，伝統とか義務の拘束を免がれない[13]

のである。当然ポーリーヌの場合も，彼女の帰属する集団，具体的には夫や父フェリックスに代表される家族，一族との関係を無視して，議論を進めることはできないだろう。

さて，セヴェールが，アルメニアの地に姿を現わした時，ポーリーヌにとって彼はかつての恋人であると同時に，もう一つ別の顔を持っている。つまり，彼女の家族に仇なす敵として出現するのである。保身にたけた政治家フェリックスが，最初に危険を察知する。自分の手で娘との仲を引き裂いた若者が，今や皇帝の寵臣となり，人妻となった昔の恋人にプロポーズにやって来たのだ。セヴェールの出現は，一族の破滅につながりかねない。

> 娘よ，彼は我々を滅ぼすだろう[14]。

もちろんポーリーヌはセヴェールの心の気高さを知っている。父親のように，保身を危うくするものへの過剰な防禦反応に動かされている訳でもない。だが，この父娘のものの見方には，共通点が存在する。彼女もまた，セヴェールの存在に父親と同じ危懼の念を抱いている。

> 彼がこの地にとどまることは，依然として私には脅威なのです。彼の徳が，いかに彼をおしとどめているとはいえ，彼には権力があり，私を愛しており，私と結婚するためにやって来たのですから[15]。

彼女の不安は，夫とセヴェールの出会いを予想した三幕一場のモノローグにおいて，最高潮に到する。二人がいかに高潔な人柄であろうと，所詮人間は欲望に支配され，怒りに駆られ易い生き物である。ポーリーヌという美しい獲物をめぐって，男達の衝突は不可避ではなかろうか。

> 二人のライバルの間に，憎しみの念が生まれるのは自然の成り行きだから，会見が遂にはいさかいに終わるのも，いと易いこと（…）いかに立派な理性が，彼らの心を支

配していようとも，一方にはもの欲しさが，他方には疑心暗鬼が巣くっている[16]。

このように，男達にとって争いが一種の宿命なら，彼女もまた，人間関係を力と利害の図式において捉えるしかない。そして，対立するいずれかの陣営に身を置くしかない。

この点に関する彼女の態度は明白である。彼女は，自分の所属する集団の利益を第一に考える。セヴェールと，夫および家族のどちらを選ぶかで，悩んだ形跡は全くない。このことは，二幕二場の直前のポーリーヌの台詞からも明らかであろう。フェリックスは，セヴェールが色恋故にアルメニアまで出向いてきたのだから，恋心を逆手にとって，彼を宥め，無事追い帰すよう娘に依頼する。このいささか卑劣な提案を行った後，娘の自尊心をくすぐるかのように，たとえ昔の恋人と二人切りにして，交渉を一任しても，彼女の貞操が揺らぐようなことはないと確信している，という意味のことを述べる。これに対する女主人公の答は，簡単明瞭，自信に満ちている。

お前の操の固さはよく分っておる。— 確かに美徳は勝ちをおさめるでしょう。私が恐れているのは，結果ではないのです[17]。

要するに，セヴェールとの再会を前にして，夫と家族を守るという彼女の意志は，既に揺るぎないものになっている。この強力な動機，言わば政治的使命を帯びて，彼女は恋人との会見にのぞむのである。

では，問題の二幕二場はどのように展開するか。対話は，「私は夫を愛しており，この点について何の弁解も致しません[18]。」という女主人公の高飛車な切口上で始まる。しかし，セヴェールに薄情さを責められる度に，トーン・ダウンする。彼女は，懐旧の念に動かされ，さらに今や栄光の絶頂にあるセヴェールの姿に一段と思いをそそられ，瞬間的には彼の魅力に屈するかの如き台詞さえ述べるのである。

表面（うわべ）は，動揺していないようでも，心の内は乱れに乱れ，意の如くにならないのです。いわく言い難い魅力の故に，またしても私は貴方に惹かれてゆきます[19]。

また最後には，ため息や涙までもらすことになる[20]。

ドゥブロフスキーは，この種のポーリーヌの言動を引き合いに出して，貴族的倫理つまり克己の試みが失敗に帰した証拠としているが[21]， 必ずしもそうとは言えない。こうした彼女の「人間的弱さ」の表明は，これほどセヴェールのことを思っているのに，義務に従って諦めるのだから，彼もまた，彼女の名誉を重んずるなら同じようにすべきだ，という結

論に実に巧みにたどり着くからである。

> でも，貴方が，この貞節の務めを価値あるものとお考えなら，その誉れを私から奪わないで下さい。そして私に会うのをお止め下さい[22]。

《parfait amant》[23]たるセヴェールの名誉心に触れ，かつ絶大なる権力を手にした彼の自尊心を慰撫する完璧な論法である。

もちろん，論理が正しかったからこそ，セヴェールは説得されたのであり，ポーリーヌの示す懐旧の情が真実だったからこそ，彼の心も動いたのであろう。しかし，後者に関しては，微妙な問題が存在する。彼女は恋人を目の前にして，次第に感情が押さえ切れなくなり，全く偶発的，自然的に恋人への愛情を打ち明けたのであろうか。仮にそうであったとしても，その間も自分に課せられた使命を忘れておらず，論理の行き着く先を冷静に見通していたのではあるまいか。セヴェールへの思いの告白ととれるものが，結果的にポーリーヌが使命を達成するのに，大きく貢献している点を見逃してはならないのである。

結局，この間の彼女の行動，心理については，次のように説明するのが最も妥当だと思われる。ポーリーヌの振舞は，ある役柄を演ずる名優に似ている。全く自然でありながら，実は作為的であり，作為的でありながら，その役を演ずる瞬間は筋書きを忘れて，自然そのものである。あるいは，有能な外交官のように，と言うべきだろうか。彼女の語ることは99パーセント真理であり，従って相手を感動させ，説得する力を有するが，残りの1パーセントには彼女の使命感，あえて言えば打算が潜んでいる。

以上のような意味において，二幕二場がどれほど感動的であるにしろ，そこに述べられている感情を，赤裸々な人間の真実と捉えるのは危険であり，男女間の愛情の機微をつく驚くほど洗練された外交術，社交術の一種とみなした方が正確であろう。

☆　☆　☆

もっとも，以上の分析は，拙論が最初に提起した疑問，ポーリーヌは二人の男性のうち，どちらを愛していたかという問いに対する，厳密な答になっていない恐れがある。彼女が，夫と家族を守るために，全智全霊をかたむけて，かっての恋人を撃退したとしても，それで彼を愛していなかったとは言えないからだ。ただ，繰返し述べたように，彼女には己の恋情を越えた使命感が存在する。この使命感は，単に義務と呼ばれるには，余りにも人間の血肉に根ざした本能に近い何かを感じさせる。危険から家族を守ろうとする，雌ライオンの本能のようなものである。そのために，彼女は，過去のあるいは現在の恋情を打ち捨

ててかえりみなかったし，と言うより，そうした感情を，目的を達成するために，巧みに利用したのである。

ポーリーヌにおける義務感とは，言わば彼女の所属する集団の生存意志の表れであり，理性と意志は，それを実行するための武器，何より防衛と闘争のための武器なのである。

註

1）《Ce qui distingue le héros cornélien, c'est l'identification instantanée de l'être et du vouloir: (...) Quel rapport y a-t-il entre l'instant de la clémence d'Auguste et le passé de vengeance et de défiance, que sa clémence abolit? (...) Introduisant par l'acte même du choix, au milieu de la durée causale, une durée essentiellement différente, Corneille fait éclater celle-là. Elle s'évanouit au contact du moment volontaire. Le héros cornélien devient un être sans passé.》
(Georges POULET, *Études sur le temps humain* I, Éditions du Rocher, 1976, p.135, p.141.)

2）Cf. 拙論，“シンナ”，『広島大学総合科学部紀要Ⅴ』，v.16, 1990, p.9.

3）《Je donnai par devoir à son affection / Tout ce que l'autre avait par inclination. / Si tu peux en douter, juge-le par la crainte / Dont en ce triste jour tu me vois l'âme atteinte.》
(*Polyeucte*, I, 3, 215-218.)

4）《Voilà une honnête femme qui n'aime pas son mari.》
(Charles DEDEYAN, *Les débuts de la tragédie cornélienne et son apogée d'après Polyeucte*, Centre de Documentation Universitaire, 1963, p.24.)

5）Cf. *ibid*., p.24.

6）Cf. 拙論，“L'Amour conjugal dans *Polyeucte*”，『広島大学総合科学部紀要Ⅴ』，v. 17, 1991, pp.262-263.

7）Cf. Gustave LANSON, *Corneille*, Hachette, 1913, p.111.

8）《Pas un instant la “raison” ne peut “dissiper” la passion: le corps, les sens résistent. Lorsque Pauline déclare à Stratonice qu'après le choix de Polyeucte par son père,

Je donnai par devoir à son affection
Tout ce que l'autre avait par inclination,

(I,III,215-216.)

loin qu'il faille la prendre au pied de la lettre, il faut, au contraire voir qu'elle est *de mauvaise foi*. Elle a besoin de se rassurer et de se convaincre en se prouvant son amour, (...)》

(Serge DOUBROVSKY, *Corneille et la dialectique du héros*, Gallimard, 1963, pp. 232-233.)

9) Cf. *ibid*., pp.92-96.

10) 《(...) cette rencontre de Pauline et de Sévère, qui est sans doute l'un des sommets de la littérature de tous les temps.》

(Antoine ADAM, *Histoire de la littérature françcaise au XVII*[e] *siècle*, t. I, Del Duca, 1962, p.540.)

11) Cf. *La Galerie du Palais ou l'Amie rivale*, I, 7, 148-176.

12) 《des individus intégrés à un tout: gens, clan, patrie ou Etat.》

(Octave NADAL, *Le sentiment de l'amour dans l'œuvre de Pierre Corneille*, Gallimard, 1948, p.161.)

13) 《Dans une telle formule scénique il ne peut y avoir place pour l'amour seul. Ce sentiment reçoit son rang, se mêle aux mœurs, à la vie sociale, (...) Jamais assez pur pour se réfugier dans la solitude, jamais assez exclusif pour renoncer à la famille, à la patrie, (...) il ne s'évade ni de la tradition, ni des devoirs, (...)》

(*Ibid*., pp.161-162.)

14) 《Il nous perdra, ma fille.》

(*Polyeucte*, I, 4, 327, 329.)

15) 《Son séjour en ce lieu m'est toujours redoutable; / A quoi que sa vertu puisse le disposer, / Il est puissant, il m'aime, et vient pour m'épouser.》

(*Ibid*., II, 3, 590-592.)

16) 《Comme entre deux rivaux la haine est naturelle, / L'entrevue aisément se termine en querelle: (...) Quelque haute raison qui règle leur courage, / L'un conçoit de l'envie, et l'autre de l'ombrage;》

(*Ibid*., III, 1, 737-738, 741-742.)

17) 《Ta vertu m'est connue. — Elle vaincra sans doute; / Ce n'est pas le succès que mon âme redoute:》

(*Ibid*., I, 4, 353-354.)

18) 《Oui, je l'aime, seigneur, et n'en fais point d'excuse;》
(*Ibid*., II, 2, 461.)

19) 《Et quoique le dehors soit sans émotion, / Le dedans n'est que trouble et que sédition. / Un je ne sais quel charme encor vers vous m'emporte;》
(*Ibid*., II, 2, 503-505.)

20) Cf. *ibid*., II, 2, 535-536.

21) Cf. Serge DOUBROVSKY, *op. cit*., pp.236-240.

22) 《Mais si vous estimez ce vertuex devoir, / Conservez-m'en la gloire, et cessez de me voir;》
(*Polyeucte*, II, 2, 539-540.)

23) Cf. *ibid*., II, 2, 572.